



# お湯加減はいかがですか？

〈東京都〉ながた長田 みほ美保 54歳

私が訪問看護師として初めて自宅に

伺った日、Tさんはソファに座り「食欲がなく体がだるいんだよ」と弱々しく話しました。その傍らで高齢の奥さまが心配そうに見つめています。Tさんはぼうこうがんと診断されて、尿を外へ出すためのチューブを挿入していました。治療していた病院では「もうこれ以上の治療法はない」と告げられていたのです。

穏やかな表情でしたが、その大きな瞳はしっかりと私を見据え「あなたは何をしてくれるの？」と問い掛けているようでした。話をするうちにTさんが「家のお風呂に入りたいなあ」とつぶやきました。それならばと、次の訪問から入浴のお手伝いをする約束をしました。

「お湯加減はいかがですか？」。そう

尋ねる私に、Tさんは湯船の中で

「気持ちいいなあ」と目を細めながら、ふるさとや家族のことをうれしそうに話してくれました。入浴後はジュースをおいしそうに飲み、食事も好きな物を少しずつ食べられるようになりました。季節は冬から春になり、週1回だった入浴も2回に増やしました。しかしその後、体調は徐々に悪くなり、ついに自宅での入浴ができなくなりました。

その時Tさんは「もうデートができなくなっちゃったよ」と力なく笑ったのです。私は初めてTさんにとって入浴がどんなに大切な時間だったのかを知りました。愛する家族との思い出が詰まった家のお風呂でおしゃべりをする時間は、身も心もリラックスして、病氣のことを忘れられるひととき

だったのかもしれない。

夏が終わるころ、Tさんは私の訪問中にご家族に見守られながら永眠されました。奥さまの「あなたが訪問する日をいつも楽しみにしていたのよ」という言葉に、私はあふれる涙を止めることができませんでした。「人生の最期の時間を一緒に過ごさせていただきありがとうございます」。そう心の中でつぶやきながらTさんの体を拭いていると、どこからともなく「気持ちいいなあ」と優しいTさんの声が聞こえてくるようでした。